

使徒の働き16章25節 「獄中の賛美」

1A 苦しい時の祈り

1B 神の命令

2B 感謝と賛美への道のり

3B 神と人に向かう賛美

2A 足枷の中での自由

1B 御心を行う自由

2B 鎖から自由な御言葉

3B 試練にある清め

3A 賛美による解放

1B 主の戦い

2B 主を喜ぶ力

本文

使徒の働き16章を見てください。私たちの聖書通読の学びは、先週は16章の前半、1-10節を読みまし。今日の午後に11節以降を見て行きたいと思います。その中の一節、25節に今朝は注目したいと思います。「真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。」

パウロたちの宣教の旅は、ついに小アジアから、ヨーロッパに渡りました。初めに福音を語った町は、ピリピです。そこで、初めに川辺の祈り場に集まって来た女性たちに語りましたが、主がリディアという女性の心を開かれました。続けて、パウロたちは、祈り場に通っていましたが、占いの霊につかれていた女が叫び続けたので、パウロはイエスの御名によって、女から悪霊を追い出しました。しかし、彼女は女奴隷で、占いによって儲けていた主人が怒り、パウロとシラスを市場の前の役人たちのところに連れて来て、訴えます。それで、彼らの着ている物が剥がされて、鞭で打たれたのです。そのまま、牢に入れられ、足枷をはめられて、看守に厳重に見張るようにされます。

私たちが、2018年のトルコ・ギリシア旅行に行った時に、パウロとシラスが投獄されていたであろう場所を見ました。そして、役人の裁判の席を見ました。そこは、まさに市場に隣接したところであり、当時市場は「アゴラ」と呼ばれ、広場という意味ですが、多くの人々が集まることのできる広い所です。公衆の面前でむち打ちされたことがすぐに分ります。そして牢屋は、奥に連れて行かれているので、窓もなく、ひどく汚れ、悪臭を放ったところだったでしょう。そして、鞭で打たれた背中では洗われることもなくそのまま、着ている物に傷が付着し、滅茶苦茶になっていたかもしれません。すでにばい菌で化膿していた可能性もあります。そして、パウロにとっては、自分の故郷小ア

ジアを離れて、そこで牢屋に入れられていることは、耐え難い孤独感や落胆に陥ってもおかしくないでしょう。肉体的にも、精神的にもかなり苦痛であります。

しかし、似たような状況に置かれていた人で、ヨセフがいますね。主人のポティファルの妻が、ヨセフに言い寄ってヨセフが逃げたのに、ヨセフが自分を犯そうとしていたと訴えて、ヨセフは牢獄に入れられました。「創 39:21 しかし、主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。」とあります。主が共におられたのです。パウロとシラスも、それでも主がおらえると信じて、祈りと賛美で夜を過ごしました。私たちが、順調な時に、何かうきうきするような時に賛美をするということでは、賛美の力を味わうことはできません。パウロとシラスがそうであったように、苦しみの中にいる時に、賛美の力は十分に発揮されます。

1A 苦しい時の祈り

1B 神の命令

ヤコブは、信者たちにとっても分かり易い勧めをしています。「5:13 あなたがたの中に苦しんでいる人がいれば、その人は祈りなさい。喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい。」苦しんでいれば祈りなさいという勧めです。パウロとシラスは、神に賛美する時に、「**祈りつつ**」賛美していたとあります。私たちは、「祈る」ということを最初的手段にせず、最後的手段にしてしまいがちです。不要な思い煩いを抱いて、神に持って行かないことが多いです。そして、滅茶苦茶になってしまって、それでようやく主の前に出て行く、ということがないでしょうか？しかし、パウロとシラスは、すぐに祈りに取り組みました。そして祈りがら、賛美もしています。

2B 感謝と賛美への道のり

詩篇を読むと、どれほど、苦しみの中で祈っている姿が出て来るか知れません。ダビデによる詩歌が多いですが、彼は多くの苦しみを経て、最終的には救われる証しを持っています。けれども、彼は苦しみの中で、祈りが途中で感謝に変わり、それから賛美に変わっています。苦しみが過ぎ去ってから賛美しているのではなく、祈って、祈って、それを継続している中で、ある時点で主を賛美する姿勢に変わるのです。その一例を見てみましょう、交読文の詩篇 13 篇です。

¹ 主よ いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで 御顔を私からお隠しになるのですか。

² いつまで 私は自分のたましいのうちで 思い悩まなければならないのでしょうか。私の心には 一日中 悲しみがあります。いつまで 敵が私の上におごり高ぶるのですか。

³ 私に目を注ぎ 私に答えてください。私の神 主よ。私の目を明るくしてください。私が死の眠りにつかないように。

⁴ 「彼に勝った」と 私の敵が言わないように。私がぐらつくことを 逆らう者が喜ばないように。

⁵ 私はあなたの恵みに抛り頼みます。私の心はあなたの救いを喜びます。

⁶ 私は主に歌を歌います。主が私に良くしてくださいましたから。

4 節まで、苦しみの中での祈り願いであったのですが、5 節で「恵みにより頼みます」と決めました。そうしたら、神の救いを喜んでいきます。そして、主に歌を歌っています。祈ると、主がそこにおられることが分かってきます。祈ると、主がご計画を持っておられて、その最後は希望に満ちていることが分かっています。それで、まだそれを目にしていなかった時から、主を喜び、主に歌うことができるのです。

3B 神と人に向かう賛美

そして、本文では、「ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。」とあります。ここにいる囚人たちには、イエス・キリストの福音とは無縁の人々であったでしょう。また、パウロとシラスがギリシア語ではなく、ヘブル語で賛美していたかもしれず、そうすれば、ただその歌を理解せずに歌っていたかもしれません。けれども、心地よく聞いていたのではないのでしょうか。「それに聞き入っていた」とあります。

この後で、大地震が起こります。牢屋は扉が開きます。囚人の鎖も外れてしまいます。けれども、不思議なことに、彼らは逃げませんでした。パウロと共にそこに留まっていたのです！ここに、何かが起こっています。囚人たちの心にも何かが起こっているようです。

賛美というのは、神に向かっているものです。けれども、神に向かっている賛美を聞いている周りの人々には、賛美が宣教にもなっているということを行うことができるでしょう。賛美は神に向かっているものですが、人にも向かっているものだということです。ダビデが、このように詩篇で歌っています。「18:49 それゆえ主よ、私は国々の中であなたをほめたたえます。あなたの御名をほめ歌います。」国々の中でほめ歌うというのは、神を知らない人々の中でほめ歌うということです。主ご自身が、神を知らない異邦人にも、この方こそがすべての王であることを知らせることです。

2A 足枷の中での自由

1B 御心を行う自由

私は、ここの箇所を見て、彼らの自由を思います。足枷をはめられているけれども、彼らはその制限の中で自由にされていました。それは、みこころを行う自由です。物理的に束縛されていても、自由にされています。それは、神のみこころを行う自由です。「今はこういう状況だから、私はこれこれのことはできません。」と私たちはしばしば言いますね。けれども、実は主のみこころを行うことについては、それでも自由なのです。「ヨハネ 8:31b-32 あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」イエス様は、十字架の道において全く自由であられたことを思ってください。父の願われていることに、主はご自分を従わせました。そのことによって、いとも容易く、十字架の死から免れることがで

きたのに、それでも、十字架につけられることを自ら選ばれたのです。

2B 鎖から自由な御言葉

パウロは、二度、ローマで牢に入れられていました。第一回目は、使徒の働きの最後 28 章にあります。「28:30-31 パウロは、まる二年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちをみな迎えて、少しもはばかりなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」けれどもこれは、軟禁状態です。自費で借りた家ですが、ローマ兵に鎖でつながれていました。皇帝カイサルの前で裁判を受けるために待っていたのです。その後、彼は釈放されましたが、二度目、ローマで投獄された時は、本当に酷い環境のところだったと思われます。その時は、死刑はほぼ確実でした。しかし、彼はテモテへの手紙第二で、こう言っているのです。「2:9 この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばはつながれていません。」彼は、神のことばはつながれていないと言い、それで福音がそれでも伝えられていくことに確信していました。

3B 試練にある清め

さらに、私たちは試練に遭うことによって、その苦しみの中でなおのこと清められ、神のみこころを行う自由が与えられるともいえるのです。「I ペテ 4:1-2 キリストは肉において苦しみを受けられたのですから、あなたがたも同じ心構えで自分自身を武装しなさい。肉において苦しみを受けた人は、罪との関わりを断っているのです。それは、あなたがたが地上での残された時を、もはや人間の欲望ではなく、神のみこころに生きるようになるためです。」苦しみを受けることによって、罪との関わりを絶ち、神のみこころに生きるようになることができるということです。

三浦綾子さんの証しを思い出します。彼女は、戦時中、学校の教師でしたが、戦後、厭世的になり、自暴自棄になり、重婚までしました。その後、肺結核を患います。ところが、そこでキリスト者の男性、前川氏と会い、彼によって大きな影響を受けて信仰を持ちます。結核の闘病中に、洗礼を受けます。ところが、前川氏が死にます。けれども、瓜二つの三浦光世さんと出会い、結婚するのです。光世さんが、綾子さんの創作の小説の口述筆記に専念することになります。結核の他に、脊椎カリエス、心臓発作、帯状疱疹、直腸癌、パーキンソン病など度重なる病魔に苦しみながら、次々と信仰に根ざす著作を発表していきました。77 歳になるまで書き続けました。彼女は病に罹らなかつたら、信仰にいたることはなかつたし、多くの魂を信仰に導くような書籍を残さなかつたことでしょう。

私たちは、何か物理的な制限があると、「ああ、もう何もできない」と思い、物理的な制限が解けると、「これでいろんなことができる」とするのですが、実は罪の中で溺れることにもなりかねないのです。何をもちて自由なのか？を私たちはよくよく考える必要があります。

3A 賛美による解放

そして、二人が祈りつつ、賛美していたら、続きには、大きな地震が起こったとあります。そして、牢獄の扉がすべて相手、すべての囚人の鎖が外れてしまいました。そして、看守は囚人たちが逃げたものと思い、自害しようとしたが、パウロが大声で、「自害してはいけない。私たちはみなここにいる。」と言って、引き留めたのです。看守は、「救われるためには、何をしなければなりませんか。」と尋ねると、パウロは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と答えました。そして看守の一家が信じて、バプテスマを受けます。賛美の中で、霊的な解放が起こりました。

1B 主の戦い

主は、賛美の中で戦ってくださいます。霊の戦いとは、「エペ 6:10 主にあつて、その大能の力によって強められ」ることです。賛美の中で、主が戦ってくださった場面が、旧約聖書の中に出てきます。南ユダ王国の王ヨシャファテが戦った時です。モアブ人とアンモン人が、セイルの山の人々と共に攻めに来ました。エルサレムに近いテコアにて、彼はユダの人たちとエルサレムの住民に励まします。「Ⅱ歴代 20:20b あなたがたの神、【主】を信じなさい。そうすれば、あなたがたは堅く立つことができる。主の預言者たちを信じ、勝利を得よ。」そして、彼は次の用意をさせます。「20:21 彼は民と相談し、【主】に向かって歌う者たちと、聖なる装いをして賛美する者たちとを任命した。彼らが武装した者の前に行き、こう言うためであった。「【主】に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」」大軍を目の前にしているのに、なんと賛美をさせたのです！すると、こうなりました。「20:22-23 彼らが喜びと賛美の声をあげ始めると、【主】は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアンモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。アンモン人とモアブ人は、セイル山の住民たちに立ち向かい、これを絶滅させ、根絶やしにした。セイルの住民を滅ぼし尽くすと、彼らは互いに戦って滅ぼし合った。」敵が互いに滅ぼしあったのです！

2B 主を喜ぶ力

そして、賛美をする者たち自身にも、力が与えられます。それは、主を喜ぶところに、力があるからです。ネヘミヤがイスラエルの民に励ましを与えました。「8:10 主を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ。」

そういうことで、私たちは、苦しみの時にぜひ、祈ってください。祈りの中でも押し潰されそうになるかもしれません。けれども、主が触れてくださいます。主の見ておられるように、今を見ることができます。そこで感謝が生まれ、賛美が生まれます。まだ状況が変わっていない時から賛美をしています。すると、自分の戦いだと思っていたところから、主が戦ってくださっていることに気づきます。主が戦い、解放を与えてくださるのです。